

平成19年度教員個人評価報告書

佐賀大学農学部

1. 個人評価の実施状況

(1) 対象教員数，個人評価実施者数，回収率など。

対象教員数 (個人評価実施者数)	個人評価回収者数	回収率
55人	53人	96.3%

<注>

平成19年度個人評価は，平成19年度の在職者55人全員について行い，53人から回答を得た。回収率は96.3%であった。

(2) 教員個人評価の実施概要

1) 評価組織（農学部評価委員会）の構成

学部長	野瀬 昭博
副学部長	近藤 榮造
〃	藤田 修二
大学評価委員	半田 駿
〃	加藤 富民雄
応用生物科学科長	大島 一里
生物環境科学科長	内田 進
生命機能科学科長	光 富勝
附属資源循環フィールド科学教育研究センター長	尾野 喜孝
事務長	宮川 洋

2) 実施内容，方法

佐賀大学農学部における教員の個人評価に関する実施基準及び農学部教員個人評価実施要項に基づき，平成19年度の活動実績（著書，論文等の発表実績については，過去3年間）について，4領域（教育，研究，国際交流・社会貢献，組織運営）の個人評価を行った。（「農学部教員個人評価実施要項」参照）

<個人評価の経緯等>

- 平成21年2月10日（火）に学部長が対象教員に個人評価関係書類を配布し，3月19日（金）までに学科長又はフィールドセンター長に提出するよう依頼した。
一部の教員から関係書類が期限内に提出されなかったため，5月1日（金）に再度提出を依頼した結果，退職教員1人と現役教員1人を除く53人が提出した。
- 提出された関係書類（別紙様式1～3）について，各教員の活動実績を熟知している学科長，フィールドセンター長が中心となって，審査を行い（平成21年5月），その結果を学部長へ提出した（平成21年7月）。
- 学部長は，学科長から提出された個人様式1，2について，個人の自己評価及び

学科長の評価に検討を加え、概ね妥当あるいは妥当と判断した。

- ④ 学部長から、対象教員に対し、個人評価結果（様式2）を返却した。その際、評価結果に対して不服がある場合は、1週間以内に不服申立書（様式任意）を学部長まで提出するよう付記した（7月31日）。
- ⑤ 不服申立書を提出した教員はいなかった。

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

(1) 教育の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

<授業担当>

担当科目数	教員数		
	全学教育	専門	大学院
2以下	34	4	20
3～5	3	13	25
6以上		36	1

- ① 全学教育科目は、ほぼ全ての教員が担当しているが、隔年担当の教員がいることから、今年度担当者数は約7割の37人である。ほとんどが1教科の担当である。
- ② 専門科目は、全ての教員が担当しており、7割近くの教員が6科目以上を担当している。多数の科目を担当する教員は、年ごとに増加しており、教育の負担が年々大きくなっている。
- ③ 大学院科目（修士課程）は、助教や一部の講師以上の教員を除き、ほぼ全ての教員が担当しており、大学院担当教員のうち、57%の教員が3科目以上を受け持っている。

<学生指導>

指導学生数	教員数	
	学部	修士
2以下	25	40
3～5	23	9
6以上	5	4

- ④ 指導学生数（卒論生）では、教員1人当たりの学部生2人以下が25人で、3人以上が28人いる。教員1人当たり、どの程度の指導学生数が適切かは、研究室によって事情が異なるので一概には言えない。
- ⑤ 大学院の指導学生数は、主指導を担当している数を示している。修士学生数2以下の教員のうち、学生を指導していない教員は21人とほぼ半数を占めている。

<FD活動及び教育改善等>

教育改善内容	教員数
FD研修等参加	31

授業の改善など	15
TAの活用	34

⑥ FD活動などに参加した教員は、前年度については農学部FD委員会の主催で研究科委員会修了後に2回ほどFD研修会を行った関係で40人であったが、今年も31人あり、多くの教員が何らかのFD活動を継続的に行っている。

⑦ 昨年同様、授業やシラバスの改善に取り組む教員は15人であった。TAの活用は例年同様6割を越える教員が行っている。

<学生の生活指導等>

学生の生活指導時間など	教員数
オフィスアワー	14
オフィスアワー以外	43
サークル顧問	10

⑧ 学生の生活指導面では、ここ2、3年、オフィスアワーを活用した教員より、オフィスアワー以外に生活指導を行った教員が多く、オフィスアワーを設けた意義が薄れてきている。サークル顧問の数は、去年の8人から10人と増加している。

2) 教育の領域における教員の活動評価集計と分析

教育の領域における重み付けは、92%の教員が0.3又は0.4で、0.2を付けた教員は4人のみであり、達成率も80%以上とした教員が71%であった。

したがって、農学部の教員は、教育に重点をおき、その達成率も高いことが明らかである。

3) 教育の領域における自己点検評価

ほとんどの教員が本領域に高い重み付けを行ったのは、教育先導大学である佐賀大学の教員として当然であり、それなりに評価できる。また、多くの教員がFD活動を継続的に行っており高く評価できる。

一方、授業の改善などについては、多くの教員が継続的に取り組む必要がある。

(2) 研究の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析 (数値は教員数を示す。)

<著書・論文及び講演発表など>

事項	数	事項	数
著書	11	一般講演	164
論文	83	技術・品種の創出	0
総説	9	辞書などの編纂、データベース作成	0
資料・解説・論説など	47	受賞(学外)	2
招待講演・特別講演	31	知的財産権の出願等(著作権は除く)	8

① 平成19年度は、教員一人当たり査読付き論文を約1.6本、発表に至っては約3.1件と、前年度同様に高い研究活動を維持している。

② 約6割の教員が招待あるいは特別講演をしており、特許出願数も8件ある。これらことから、多くの教員が質の高い研究を行っている判断される。

< 科研費申請 >

科研費申請件数	教員数
1件	31
2件以上	1

③ 科研費申請人数は32人(33件)であり、その中での継続を含めた採択率は48%(16件)と申請件数のほぼ半分が採択されている。ただ、農学部全教員からみた申請率は約6割であり、去年の申請件数に比べて、大きく減少している。申請率を高めるよう働きかける必要がある。

< 外部資金導入 >

外部資金の導入件数	教員数
1～2	24
3～5	5
6件以上	1

④ 科研費を含めた外部資金の獲得者数は去年とほぼ同じ30人であり、約6割の教員が外部資金を導入している。

2) 研究の領域における教員の活動評価集計と分析

研究領域において、0.3以上の重み付けをした教員は86%であり、0.5をつけた教員が8人もいた。農学部には、研究意欲が非常に高い教員が多くいることを示している。

達成努力評価点60以上の教員は94%であり、また達成率を90%以上とした教員は16人いた。論文数や講演発表数等の多い業績内容や科研費の採択率などを考慮すると、自己評価での達成率が高いことは納得でき、農学部教員の研究活動は非常に活発であることが分かる。

3) 研究の領域における自己点検評価

多くの農学部教員が本領域に高い重み付けを行ったのは、前年度と同様に研究意欲の高さを示すものであり、高い研究活動実績とともに高く評価できる。

教員の定員が削減される中で、今後もこのような高い研究活動を維持するには、教員が研究に専念できる時間や研究施設の整備の確保等が必要であると思われる。

(3) 国際・社会貢献の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析 (数値は教員数を示す。)

< 国際貢献 >

件数	活動実績	留学生	研究者受入れ
1	13	14	7

2	7	9	1
3	1	2	1
4	2	0	0
5	1	1	0
6以上	3	0	0

- ① 活動実績は、各教員の留学・海外研修件数、国際学会発表件数及びJICAなどの国際協力件数の合計を示す。約半数の教員が海外で何らかの活動を行い、同様に半数の教員が留学生を受け入れている。
- ② 国際交流の実績については、総合的に前年度と概ね同様である。

<社会貢献>

件数	学会役員等	審議会委員	地域貢献 (講演・技術指導等)	ジョイント セミナー
1	11	5	13	16
2	9	7	10	11
3	3	2	4	4
4	2	1	4	0
5	1	1	2	0
6以上	2	5	1	0

- ③ 5割強の教員が学・協会の役員を引き受けており、地方公共団体の審議会委員にも多くの教員が就任している。
- ④ 地域での講演会や教育集会に参加した教員は64%で、多くの教員が地域貢献に関わっている。特に個人で30件以上の講演に参加するなど地域貢献に顕著な教員がいた。
- ⑤ ジョイントセミナーにも約6割の教員が参加し、高校の講師派遣要請に積極的に協力している。

2) 国際・社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

国際・社会貢献の領域では、96%の教員が0.1と0.2で、達成率が60%を超える教員が43人と多く、さらに90%を超える教員が11人もいた。一方、評価点を5.9点以下とする教員が6人いた。

全体として、この領域における活動は前年度と同様に高く、教員の国際交流や地域貢献に対する積極的な姿勢がはっきりと認められる。

3) 国際・社会貢献の領域における自己点検評価

農学部半数以上の教員が高度な国際・社会貢献を行っており、達成率も高く評価する教員が多くいた。反面、評価点を5.9点以下とする教員が6人いたが、年齢の関係あるいは各教員の専門領域における国外あるいは地域のニーズなどが年度毎に異なることもあり、この領域における評価に個人差があるのは当然と判断される。今後、農学部全体としては、ますますこの領域の貢献度を高めて行く必要がある。

(4) 組織運営の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析。

<組織運営の活動実績>

参加委員会数	教員数
1	7
2	6
3	5
4	3
5	5
6以上	13

7割を超す教員が何らかの形で全学あるいは農学部の委員会に参加しており、その多くが複数の委員となっている。一方、6以上の委員会に参加している教員が13人もおり、開催頻度数など委員会の性質にもよるが、時間的な面から教員本来の教育研究に支障を来すことが懸念される。

2) 組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

この領域に対する重みは、80%の教員が0.1と0.2であり、達成率を60%以上と評価する教員は94%で、21人も教員が達成率90%以上としている。このことは、農学部の多くの教員が、組織運営には活動の重点を置いてはいないが、与えられた仕事は確実にしていることを意味している。

3) 組織運営の領域における自己点検評価

ほとんどの教員が本領域に低い重み付けをしているが、多くの教員が複数の委員会の職務を担い、6つ以上の委員会には13人の教員が関与している。

多くの委員会に参加し、そこで活躍することにより組織運営に大きく貢献をしている教員には高い評価を与えなければならないが、同時に教育研究が手薄になることが懸念される。このような農学部の現状には、いかなる評価を与えたらよいか大いに悩むところである。このためにも、組織運営の高度化、効率化、集中化等を検討する必要があると考えられる。

3. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

1) 総合評価の集計・分析と自己点検評価

<総合評価>

総合評価	総合評価点	実績評価点範囲	教員数
特に優れている	5	4.0～	18
優れている	4	3.5～3.9	19
おおむね良好	3	3.0～3.4	11
改善の余地がある	2	2.5～2.9	1

改善を要する	1	～2.4	0
--------	---	------	---

<達成努力評価>

達成努力評価点範囲	教員数
90～	8
80～89	19
60～79	21
50～59	1
～49	0

- ① 総合評価については、76%の教員が「特に優れている」または「優れている」であり、これらに「おおむね良好」を加えると、98%にのぼる。したがって、平成19年度の教員の総合的活動状況は高く評価できる。
- ② 1人の教員が「改善の余地がある」となっているが、活動実績の内容については十分に高く評価できるものであり、本人の自己に対する厳しい姿勢が原因である。したがって、農学部評価委員会は、これらの教員に対する改善のための指導等の必要性はないものと判断した。
- ③ 達成努力評価点について、教員の55%が80点以上となっているが、教員の実績評価点は前年度よりやや低くなっている。また、60から79点の間で評価している教員は21人もいる。活動実績では優れているのに評価が低いのは、安易には満足をせずに比較的厳しい姿勢を持つ教員が多くいることを示している。